詞通路

上

ホ 2
370
1

東京帝國學士院圖書
370
1
明治廿年十月廿日購求

詞のかよひ路序

世ふにつけてつけて人のもてなすわざ。たとへば人のこゝを樂しましめさとなすべきものあるを。今れば。それの中ふ歌よりもまさるもの。物よりこゝろふまさりてなるべき。たゞもとゝはしやとも。うれしとも。思ふ心をのべつゝ耳よりいでゝあらむ。それ言葉のよろしうるむを。人のきゝ

めて。おむのしやうもとゐなしやうとゐをむふ。わの
そなちなくさうて。楽しきおもふ屋紀ことわり。
かくいふも古事紀日本紀ふ見えて。神世上古
世哥のもやつむひちわふ。今世世とてを
ちゐるこふちるるひなある屋し。そもも
藤原奈良の法代を経て。寛平延喜のころを
ひよりて。大やけわうしいよくちゐりふいみしを

もてゐそひくさとみりて。花ゐ葉を出のゐろ音
ふ表け。月雪霞のをそふしふもよちされ。高き
みしのゐ山やむ我かうくくさはひと形むちゐ
もてゆをて。事ひろくなはまふ。形ふろ孔の
題をまうけて。おのの身ふあつうらぬ事ゐを。
その屋をふしふ形きゐ紀こやをを。意よまれ
振ふまれ。海川野山ゐ名やところふよそへ。こ法

を後こしの方へ引いて。世ふりゆかさぬ先つらしれんを人をやはけ。あるを志ゑん高く志けるおこしやすふかく。学ひえるゆるりのほとを。よみの多カのきを。やをを見えを志れて。そのよ知哥を。よれ哥と見さるあて。同し哥よみ友多をさら哥を。又さらぬよを。ふてを。こをおもしろく

やをを見て。或を遠れさるひふを字つし志へて。もてをやをめるを。男ひほこるとを哥られを。

ゆとを後よく樂しの哥しやを。志れなむやをて。上古中昔の人の。ん詞の先て多れを。神を人をん歌うをかしけむ多めしおほえて。言霊ちはふ道ゆを志をゆふを。のりける。今をむかしを心を種の道なれを。いをて世よ秀

あるをかし。んをくるをし。思ひをたらして。なこやく
のへあるむさ。杉深ろけなるぬ志ろさ形さ。
一首ゐてをよくなみえるむさかへも〳〵を
その樂しさ後の歌めやさ。まく家集ゐまれ
何ゐまれ摺巻ゐ何らはして。世ふひろくなる形む
後さ。末の世久しく伝ちて。ゐ代ゐちあぬを
詞の玉そゐ思さむ形ひさ。芝くさへ形む何る歌き。

大ゐるの世ゐをさられぬ人の巻ゐ形ゐられる
ゐめしをさゐ形ゐられ。梅本朝臣山部宿祢さ日本
紀ゐをそその名さゐるされる人くなれゐをを。
第巻集ゐ見えるる形むゐみし紀。此二人を神ゐ
をゐゐむをゐりの号紀人なれを。ゐゐゐをを
ゐやを紀さ侍形り。喜撰法師檜垣姫をを。その歌
ゐより世ゐ何まゐくさるぬ人なくを。かくゐふを

はしめよりて。此道は与謝野
氏の歌のかきりを抜こなひて
多くの形式。今の世の人よりは
いさゝかも 古は法ふ多くひかるゝをめふ毛昔は例
ふよりはさらむも。いふあひなくらちをゝ抜 わさ
なりとおもし。詞は玉緒 詞の八衢を字ひまはひの
法ふ。のゝくまてとも多くのへしよりあきらえさせ
まわしくはむ。そふ所なる人はいへゝくちの抜ちの抜

学は道さのりふて。そこかゝことよりきゝひらはち
何らの書ものもゝ。ゝめつらの形る事おなのれ
も。たゝやく鈴屋翁の著しおのれ多るも。まめやかよ
教へさとゝて。ゝへて物学ふ人の多めふその功こよ
なくこゝおなゆれ。それふつきて後鈴屋翁の八衢
ゝ志るへこゝまめやかなる教なも。わのもゝもらの
机ちのくゝ形ちのる抜書ちりといへ抜。そふ此ちら

たせる。詞の通路を多家の教いちじるく。まめ〳〵しく
書なり。此道ふかく入るべし。ゆく〳〵行きゝふかめられば
ちあらたなるべし。かくなえさとしまく所也。

文政十一年戊子秋　　本居大平

詞通路上巻

本居春庭著

まめ〳〵清國の言葉はいとも〳〵あやし〳〵久しく〳〵なる事
はいつもはじめて又をしへをうけさるおのづからあらはれて
いとゞ〳〵いさかしたらう事はもとよりきゝいとゞ〳〵きゝたち
ふなもむかしかしをもの学びせむもこゝはいのちのあるを
ゝうもつくさるべきなり

ゝくふるつくさけること紫のうつろひ染を

あとふるゝみてそいとゝうれしきる

はて今は人を詞のことをとゝのふかしをたゝうひさまるといふ

ふることいくさ事なく詞のことをきくむとすれハそのたうひさまを
ゆくさきまつくきこゆなりことをきくむやをくつうひさ伊ゆを
こうれむをかくて又ふこかき言ゆまむるたうひ詞のこうを
うくこうくも用ひさまをかこゆくむまていさくうも用ひ給
事をなうくきを詞のことをれこ給ふてもこの用ひさまをこう
たう時をおのつうう語を多うくしたれことうくいうしくの
例をきうあきくむくきうたうう
世中に天地をくしめあうとうるふうの物うまうあやし
うくくをくうたうけう申う人のをれいひを霊ひをたち
くふをこをあをすくうる玉と書ひいひつき事て皇玉ハ詞ふ

ふれ玉ふをうくしてををこ伊いと正しく清らうなう事ハたうも
いこうくふのをまをかくこうふいをこうれ芳別をもくをくしくをま
うふいひうくうふ又奇を詞ふ思つをまをけふるをのをれハ
こ詞のたうひをまてうをこ事のふうき
たうふをくなをこをもあうくう一文字ハ用ひをまをかたう
てをれいうくをふうを事なをと又をたうけをまをいひたうふをうて
言うをいうくいうあを事をあをもおのつうくあうくを先ををくてい
をくをすくうくをくいをくたくをうをふうちをもあうけう
をて伊詞のうくくれてうをいなを神代をおのつうくのたうまう
ありていをくうを見うう射ををこをうくうくハ芳をあ事を

なるなりちさとさとしたことをふるき中をとうしたくきこととなる
事なるべくりれと人のつくるきこもとてはうち幼くき事なるべく
そくこたちくうれさもとうかむとうくきくきくこうくき事ちう
きくて詞のことをあるもちる考くきくむちたそのはくしさ面
てくとれ宮うとうきまくきうて始せしいくうもたうこと
なく語ることなるくくそくこ今れ云のなくての人のとれいひ
はくひうる詞のはくひはまてくとをかくおのつくうくを宮う
あるてむくうとなくうふこなくく詞のこいるるもきくめ人を
をいひさまてくとれ宮くおのつくうく雑くくれくこをい
ひとくうよいさくうもあやまりたくうるなきくてをと幼年くく

はもくふこかきさ欲とるもむとくをはいうくうれ宮れ
さまるとよく考くうきまくむ事をむねとはきくはうもむ
宮るるさくひきはくはうのさまくあうくなるうむくつふ
くうはひうれるこれあれくゆきるるくきくつなはあもひくうくむよ
くくかきつくうきなり

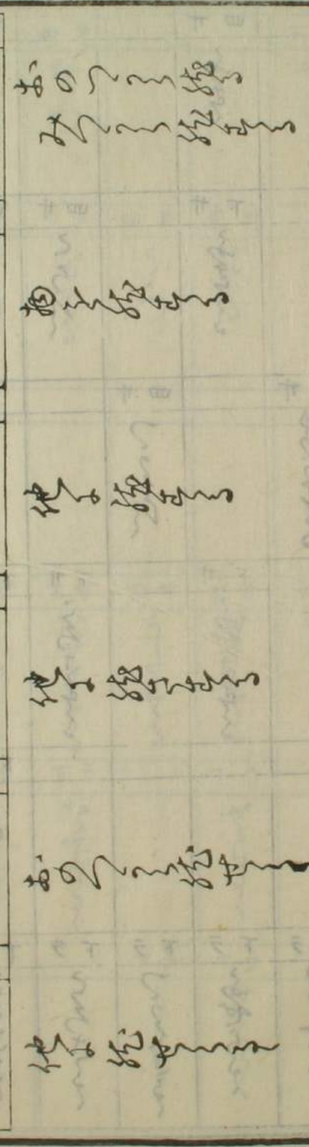
詞の自他の事

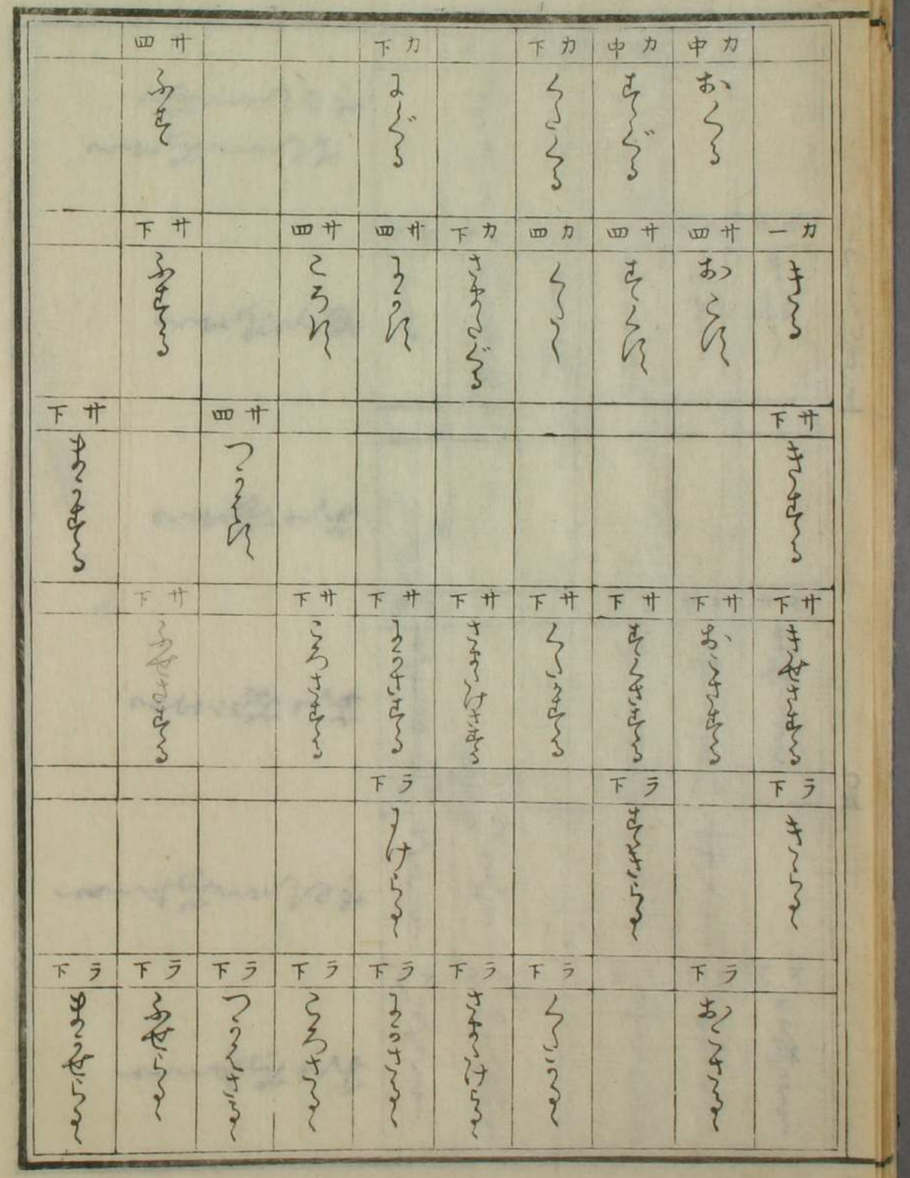
歌よむるふくくうもるをきくもるもう後つの事をうとち
くはまをとくくくきくきくるなしくくくは自他の分等の
語をはねくう後うくきうはおのつくうれさくきうそ
きなくれくをいうまをくうるはくうつくきくこくくはくひ

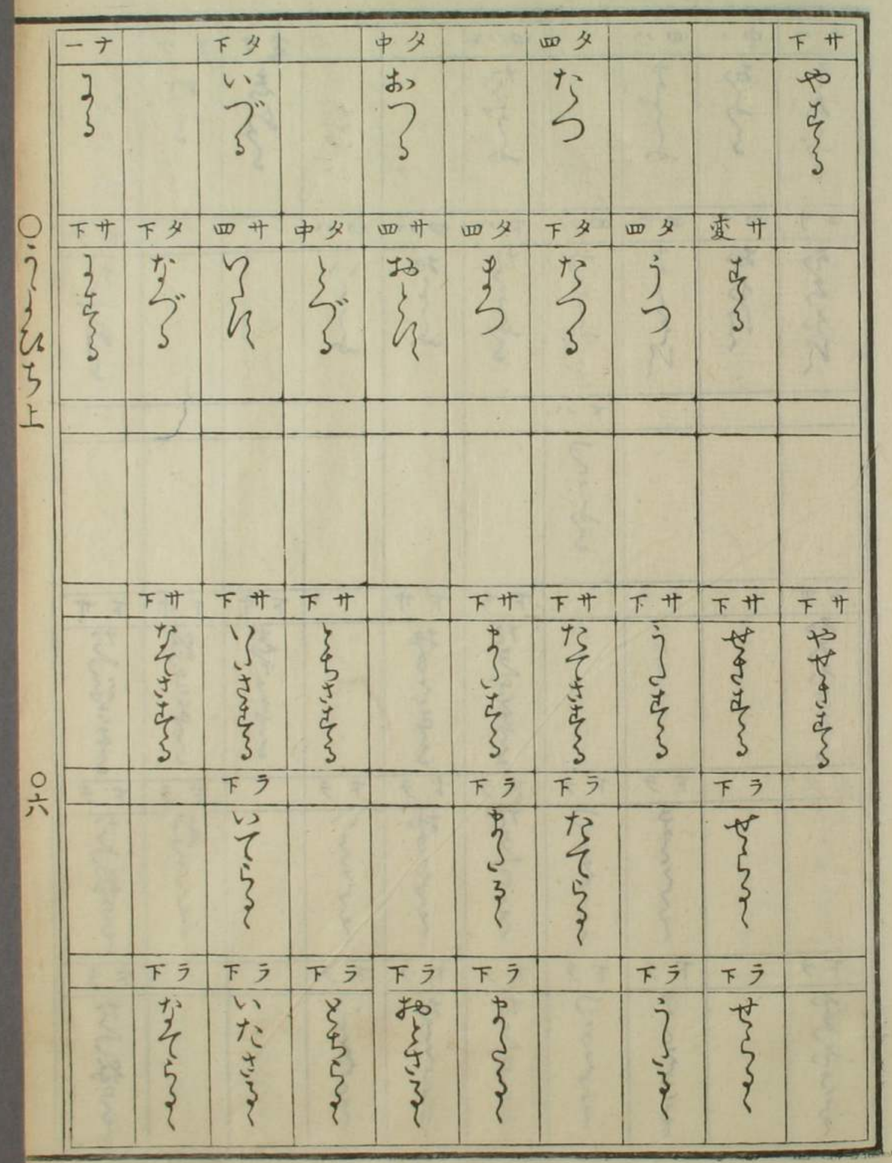
おもてにかくるをかくるまいうゑ用ゐくき詞と法こうとはしかて
そ事くそくくそうしをを自他混雑して詞とこのくにくきはまを
えおくけしくなるくふ呂びまくきをよくやきまくおくき事
なりもくにくくくまくふくもいくくみくゑつのこくゑ
くはくくいひくうつまるしいそはくくきさをくきくおく
かうくと世の人自他の詞をたくくゑ煙かすれきくいをみのつくく
きつくくといひきつるといをを人のくつる事をいひきを花の
ちくといをきおのつくくちることちくくちくくいをこをなをの
ちくくことなくくれくなるくさくふ呂びてくくくく考くきくき
事くもみをひきくくく又この事をくくくくくる書くをなけ

れくおのつくくのくくもなくおのれこをくくくみ
くくれくくくくく

若因ていまちあけくる詞のかくらる四カとあるハ加行四段
のくくくき詞一カとあるを加行一段のくくくきき詞集中カとあるは
加行中二段のくくくきこと下カとあるを加行下二段の活くこと集
変カとあるを加行変格のくくくき詞なる除の行くくくこと集
まなくくくくてきくく




カ中 カ中 カ中 カ下 カ下 カ下 四サ
カ一 四サ 四サ 四カ 下カ 四サ 四サ 下サ
下サ 四サ
下サ 下サ 下サ 下サ 下サ 下サ 下サ 下サ 下サ
下サ 下サ 下サ 下サ 下サ 下サ 下サ 下サ
下ラ 下ラ 下ラ
下ラ 下ラ 下ラ 下ラ 下ラ 下ラ 下ラ 下ラ


下サ 四タ 中タ 下タ 一ナ
変サ 四タ 下タ 四タ 中タ 四サ 下タ 下サ
下サ 下サ 下サ 下サ 下サ 下サ 下サ 下サ
下ラ 下ラ 下ラ 下ラ 下ラ
下ラ 下ラ 下ラ 下ラ 下ラ 下ラ 下ラ 下ラ

	ナ下	ナ変			ハ四		ハ四	ハ中
	ゆる	きめる			なぐふ		きぐふ	わろぶる
ナ下			ハ四	ハ四	ハ下	ハ四	ハ四	ハ四
なづめる			いくふ	おくふ	なくる	つうふ	きくれ	おくれ
						ハ下		
						つくる		
サ下	サ下	サ下		サ下	サ下			
なつ縮きまる	縮きまる	きだきまる		おもくきまる	たくさきまる			わろかきまる
ラ下	ラ下		ラ下	ラ下	ラ下	ラ下	ラ下	
なつ縮らる	ねつらる		いくらる	おもくらる	たくらる	つくらる	きくらる	
ラ下			ラ下	ラ下	ラ下	ラ下	ラ下	
なつ縮らる			いくらる	おもくらる	たくらる	つくらる	きくらる	わろかさる

				ニ四	ニ四		ニ下	ニ下
				くむ	きむ		さむる	あびゆる
ハ下	ニ四	ニ下	ニ下	ニ下	ニ下	ニ中	サ四	ヤ一
かぐふる	ききまる	いむ	くむる	きむる	うむる	さきる	とぐむる	いる
サ下	サ下	サ下	サ下	サ下	サ下	サ下	サ下	サ下
かくきまる	ききまる	いきまる	くきまる	きまる	うきまる	きまる	どくまる	いきまる
ラ下	ラ下	ラ下	ラ下	ラ下	ラ下			
かくらる	きくらる	いくらる	くきまる	きまる	うくらる			
ラ下		ラ下	ラ下	ラ下	ラ下	ラ下	ラ下	ラ下
かくらる	きくらる	いくらる	くきまる	きまる	うくらる	きまる	どくまる	いくらる

ヤ下	ヤ下						ラ中	ラ中	ラ中
カ四	ア一	ラ四	ラ四	ラ四	ラ四	サ四	サ四	サ四	サ四
サ下	サ下	カ下	サ四	カ下	サ四	ハ四			
サ下					サ下		サ下		
ラ下	ラ下								
ラ下	ラ下	ラ下		ラ下	ラ下		ラ下	ラ下	ラ下

	ラ下		ラ下		
牙一脈					
	ラ四	ラ下	ラ四	ワ下	
牙二脈					
牙三脈					
	サ下	サ下	サ下	サ下	
牙四脈					
	ラ下	ラ下	ラ下		
牙五脈					
	ラ下	ラ下	ラ下		
牙六脈					

牙一脈牙二脈を四種のくらきに入ようりてさるべきなり

牙三脈をあかく佐行下二脈のくらきなれといえども

ゆをかけてくらきにきとすべし牙四脈を佐行下二脈の法と

かきれば牙五脈牙六脈を座行下二脈の法よりきりてかの

くらきなり

ちよ拳こる句のうち第一脈と第二脈といふこと第二脈
と第四脈ともいふ近くてきこうち法行下二脈よ法きこるを
他よ拍をこと他よ拍さすることをうのこるあるこ法式
法舟よること[illegible]て[illegible]せ行つれことあたらひるなか
ら老こ第四脈と第六脈を句の法とあるこ[illegible]れ
ことこと紀なるこれい第一脈よかくき句う第二脈よかくき
句ろ又第三脈よ出るき句ろ第三脈ようくきことこるき
さうまきこはき句もいとまれくるをあるこうち
おるこて自他のひさまいさこうさるあるこ又句の
うれこまきまてかこ法よなゆるとあれとくく

まれなる事こて百よ一つとあるこされこちこけるをあるこ
けるるなるこつさくかめるるをとく出て法こるこるこ法
さる和の相よいひるを云のなるこうこなれこれ事くくく
あけつこるちかこ見くこときこをこるひのこるこう
なるはちうくまきこはこく見ここと自他を別つる
いさこうこかくこるこ事なれこまこくこ法こよく
よこうもこく見こおのつこうこるこ
こるもこくこかく自他のこるこる句の法るこる事なれここ
いひさまきこまくなれこ行こること法行こうつ
てつこること羅行こうつこるこの三つちこされこつふ

あつうるぬとなきよハあゝ行といとゝまれるるなりるるし
行ゝてゝうゝけ加行ゝてゝるるゝ　ゝぶゝ波行ゝてハゝぶ　ゝぶゝ
羅行ゝてハゝる。ゝゝぶゝなゝゝぶゝゝなゝゝぶゝ佐行と羅行ようう
てゝゝうゝゝさゝあゝを多くハゝを行の法のゝを行の第一の言第三れ言
第五の言ゝう佐行と羅行よゝうゝてゝゝうゝ事ゝる第一れ言
ゝゝうゝうゝゝき和ゝゝる。ゝあゝぶゝゝを加行の法行ゝれゝかゝゝうゝ和と
ゝゝう。ゝあゝぶゝと佐行ようゝうゝなゝやゝぶゝゝぶハ麻行の法ゝれゝと
ゝゝうゝなゝや羅。ゝゝぶゝと佐行ようゝうゝかゝゝう。ゝあゝぶゝを多行の
ゝゝゝゝきゝれゝを加ゝゝかゝゝう。ゝあゝぶゝと羅行ようゝうゝいゝぶ。
ゝゝぶゝハ波行の法ゝれゝはゝゝゝかゝゝいゝはゝぶ。ゝはゝゝと羅行よゝ

つゝるゝをゝゝうゝゝゝる第三れ言ようゝうゝを和ゝゝぶゝを加行の
ゝゝゝゝきゝれゝゝゝゝゝゝゝと佐行ようゝうゝあゝぶゝハ麻行の
法ゝれゝゝゝあゝゝと佐行ようゝうゝゝゝ第三れ言ようゝ羅行
ようゝうゝをいゝゝゝゝれゝゝる第五の言ようゝうゝハゝゝゝを加
行の法ゝれゝゝゝハゝゝあ。ゝぶゝと佐行ようゝうゝあゝゝぶゝを波行の法
ゝれゝゝゝ佐行ようゝうゝゝゝゝゝゝれゝゝゝと佐行ようゝうゝゝゝゝを麻行れ法ゝれ
ゝゝゝゝと羅行ようゝうゝゝゝゝゝゝけゝゝゝゝて第一
の言第三れ言第五の言ゝれゝ佐行と羅行ようゝうゝゝゝきた
る行第一の言ようゝうゝれゝハゝゝを第一第三れ言第五の言ようう
ゝゝゝゝをいゝゝゝれゝゝう又第二れ言第四の言ゝう佐行羅行ゝ

うゑ活きくるもあれとそいさこう見て中二段の活用を
第二段言ふ活行羅行の第一段言のそひておくるをおきさをる
あきらるとづるをちらさるちらるとちらさるくるくるくさ
下二段の活用をその第四段言ふ活行羅行の第一段言のそひて
ゑきもづるをゑきもづきもづる辭つらるなと活行羅行ふ移り
活くゆるう又右ゑ段かくを活用のを行段言ふ活行と羅行
ふうくくくくきて自他のゑゑ事なると活行と羅行とて
自他のゑゑ行の中ふ活行ふう羅行ふうたるもあら
ばゑゑ羅行ふう活行ふ移うたるもあるめ一辭あるをを
うべるあくをべあくをべなとのかしふ活行と羅行ふ他

の行ふうべ二行ふうて自他のゑゑ行をふおのつう
別をゑゑあるなとゑゑ一段の活ふ活ふ
きずるるるずるるずるるずると移うるもあれと一段の活ふ
限りてゑゑを又見ゑゑ又行の活きを活ふて四段言なるも
られうをあくゑゑむるとゑゑ。あゑるとあやうるだるかし
ふゑあけくゑる活くのゑひをまれ和。なを活きなるゑあるく
ゑれとをを見ふなをくくをきなをきをうくくをれを
ゑてをゑきくくはくく笑くかるうるけれを活くふをの活きを
ををのゑゑひをゑゑちをれたくをの大体ををゑゑおくををを
ゑきをゑゑ

○同行活用例

加行四段活用

ゐりそく

なびらく

はく

のく

やく

右上なる活のみのつゐ終止形をいふ活下なるものを

終止形といふ活ゐり

加行下二段活用

ゐ四段活用

くるる

とる

ぬる

そる

やる

ゐを上なりて下二段活のうるものをおのつゐ

終止形といふ活四段活のうるものを終止形をいふ活ゐり

佐行四段活用

ゐ下二段活用

ふる

右上なるふみつゐ終止形をいふ活下なるものを終

[illegible]

多行四段活用　　四下二段活用

[illegible]。　　[illegible]。

[illegible]。

右上なる[illegible]語のおのつゝ終る[illegible]下なる[illegible]語を終る[illegible]といふ[illegible]

波行四段活用　　四下二段活用

たゞぶ。　　たゞぶる。

ちゞぶ。　　ちゞぶる。

つゞぶ。　　つゞぶる。

[illegible]ける。　　[illegible]ける。

なゝぶ。　　なゝぶる。

右上なる[illegible]語のおのつゝ終る[illegible]語下なる[illegible]ものを終る[illegible]といふ[illegible]

波行中二段活用　　四下二段活用

のぶ。　　のぶる。

右上なる[illegible]おのつゝ[illegible]語下なる[illegible]ものと[illegible]とつゞく[illegible]ふのつゞく奉てを[illegible]はゝ[illegible]とする[illegible]なるこゝろをあらはすこゝろをく[illegible]ての例なしをもち上

麻行四段活用

さむ。
たゆむ。
なさむ。
やむ。
ゆうむ。

右上なるは物のおのつから絶るといふことなり下なるハ物を絶さるといふことなり

羅行四段活用

いる。

同下二段活用

さむる。
たゆむる。
なさむる。
やむる。
ゆうむる。

同下二段活用

いる。

右上なるはおのつから絶るといふ用下なるハ他を絶するといふことなり共ことにふりがなをつけ

羅行下二段活用　同四段活用

きる。　きる。
ゐる。　ゐる。
やぶる。　やぶる。
うる。　うる。
をる。　をる。

共に上なるはうせまりて下二段活の方物のおのつから絶るといふ用四段活の方ものを絶するといふ用なり

羅行四段活用　　四下二段活用

あなつる。　　あなつる。
いのる。　　いのる。
そそる。　　そそる。
もゆる。　　もゆる。
けする。　　けする。

右上なる八段を他段活用下なる段を他段活用とす
おのつる段ゆらるゝとうの段なり此下二段の活用
らもれそゝられたとゝ活用さまいさうなり
是より佐行と羅行の活用なる段をあく

そうつさまをよるもいつるかく加行の活用なる佐行羅行
ようつる活けるそ行の牙一れ舌牙之の舌牙五の舌より佐行
羅行ようつる活く事なり外の行ようつると見るべしく
てそうくきるり挙くる段の左のうこふ・をつけるハその行
の牙一れ舌牙之れ舌牙五の舌まて佐行羅行ようつる下ち
○加行より佐行ようつて自他のそうる例

加行四段活　　佐行四段活

うこく。　　うこる。
おこる。　　おこる。
かこる。　　かこる。

○うこ　ちち上

なひく。
なひうる。
つく。
つうる。

右上なるものおのつから終をいつこゝも下なるを他と終
るものをいつこゝも下なるを他と終

加行四段活
おく。
かく。
さく。
たく。
ふく。

佐行下二段活
おうる。
かうる。
さうる。
たうる。
ふうる。

右上なるものおのつから終をいつこゝも下なるを他と終
るものをいつこゝも下なるを他と終

加行中二段活
おくる。
きくる。
けくる。

右上なるものおのつから終をいつこゝも下なるものを他と終
るものをいつこゝも下なるものを他と終

加行下二段活
あくる。

佐行四段活
あう。

ふ。ふ。

右上なるをおのづから他と相違することとなり

ふ。ふ。

右上なるとおなじ段下なるを他と相違することとなり

○加行より羅行まで自他のまとめて例

加行四段活

つぐ。

のぐ。

ふぐ。

ぐ。

羅行四段活

つぐる。

のぐる。

ふぐる。

ぐる。

右上なるとおなじ段下なるをおのづからまとめることを

いふことなり

加行四段活

あさむく。

いつく。

ぐく。

くみく。

まゝく。

羅行下二段活

あさむくる。

いつくる。

ぐくる。

くみくる。

まゝくる。

右上なるをまとめて相違することをいふことなり下なるを他にまとめることとなり

加行下二段活

羅行四段活

かぐる
さぐる
さぐる
たるる
ひろる

右上段の語を活用するをいふ
いふこころなり

○佐行より羅行まで自他のるる例

佐行羅行
るる

こうる
さうる
さうる
たるる
ひろうる

右上段の語を活用するをいふ
いふこころなり

○佐行より羅行まで自他のるる例

羅行下二段活
ろる

そめる
める
ふてなる
ふぐる

右、下段の語を活用するをいふ
をいふこころなり

○多行より佐行まで自他のるる例

多行四段活
うる
うる

そくのる
ゆる
ふてなる
もぐる

右上段の語を活用するをいふ
をいふこころなり

○多行より佐行まで自他のるる例

佐行下二段活
うる
うる

ふ。
ま。
と。

右上なるをふうゝ続てとゝ下るハ他と続さゝ
るとゝ下る

多行中二段活

おづ。
おづ。
ふづ。
ひづ。

佐行四段活

ゆづ。
ゆづ。
ぐづ。
ぐづ。

右上なるをおのつゝ続てとゝ下るハ他と続さゝ
るとゝ下る

○多行ゝ羅行ゝて自他のゝ例

多行四段活

あやまつ。
かつ。
こゝろつ。
たつ。

羅行下二段活

あやまつる。
うつる。
こゝろつる。
たつる。

右上なるを他と続するとゝ下るハみゝ続せゝ
と他と続せゝるゝとゝ下る

多行下二段活

あつる。

まつる。

羅行四段活

あらる。

まらる。

右上なる段あを続けるを以て羅下なるをおのづから続けるといふこと

○奈行より羅行ようして自他のまること例

奈行下二段活

うさめる。

はさめる。

羅行四段活

うさなる。

はさなる。

右上なる段あを続けるを以て奈下なるをおのづから続けるといふ

こと

○波行より佐行ようして自他のまること例

波行四段活

うふる。

あふる。

かふる。

さふる。

まふる。

佐行四段活

うるる。

あるる。

かるる。

さるる。

まるる。

右上なるをおのづから続けるを以て下なるをこのと続けるといふ

波行四段活

あふ。
くふ。
たうふ。
とふ。
ぬふ。

右上ゑうはうてうゑ紙をとりて何下なるハ他よ紙さをとりてこゝをなり

波行中二段活

あふ。

佐行四段活

あそ。

佐行下一段活

あせる。
くせる。
たくかせる。
とせる。
ぬせる。

右上ゑうはうてうゑ紙をとりて何下なるハ他よ紙さをとりてこゝをなり

波行四段活

かろふ。
たろふ。

右上ゑうはうてうゑ紙をとりて何下なるハ他よ紙さをとりてこゝをなり

○波行より羅行よりて自他のまうゑ例

波行四段活

きらふ。
さらふ。
もらふ。
やらふ。

羅行下二段活

きらる。
さらる。
もらる。
やらる。

やしふ。

右上なるそうつう紙をとりてこれを下なる他よりもの
やらうをいつる句なり

波行下二段活　　羅行四段活

かつる。　　かるる。
くくふる。　　くくる。
さふる。　　さる。
なつさふる。　　なつさる。
をふる。　　をる。

右上なるそうつうをとりて句下なるもおのつから紙を

つふこくくをなす

○麻行うり佐行ようつて自他のるるる例

麻行四段活　　佐行四段活

くろむ。　　くろまる。
まむ。　　まる。
ぐくむ。　　ぐくまる。
なやむ。　　なやまる。
くけむ。　　くけまる。

右上なるそおのつから紙をとりて句下なる他を紙すること

○うるひち上

麻行四段活

ま・む。

の・む。

ら・む。

を・む。

右上なるをうつして他に結ぶなり

をいふこころなり

麻行中二段活

あ・む。

右上なるうつしてをなるを他にうつす

佐行下二段活

さ・ま・む。

の・ま・む。

ら・ま・む。

を・ま・む。

右上なるをうつして他に結ぶなり

麻行四段活

さ・む。

右上なるをうつして他に結ぶなり

麻行下二段活

さ・む。

右上なるおのつからなるをうつして他に結ぶなり

佐行四段活

さ・ま・む。

右上なるをうつして自他のこころを例

麻行四段活

た・む。

羅行四段活

た・ま・む。

右上なるをあと結ぶなるをおのつからなるを結ぶと

いふこころなり

麻行四段活

うつむ。
かつむ。
すつむ。
めつむ。
ぬつむ。

右上なる他を絃とする行下なる他を絃せざるを
いつてこれなり

麻行下二段活

あつむ。

羅行下二段活

うつぶす。
かつぶす。
すつぶす。
めつぶす。
ぬつぶす。

羅行四段活

あつまる。

あつまる。
きつまる。
ぶつまる。
をつまる。

右上なる他を絃とする行下なるものつづく例

をいつてこれなり

○也行うり佐行ようつて自他のつづく例

也行下二段活

あやる。
いやる。

佐行羅活

あやす。
いやす。

つひゆる。
くゆる。
こゆる。

つひやれ。
くやれ。
こやれ。

右上なるはおのつから終止となる活用なるものを終止形
といふことなり

○羅行より佐行まで互に例

羅行四段活
くゆる。
ちる。
てる。

佐行四段活
くやれ。
ちれ。
てれ。

なる。
める。

なれ。
めれ。

右上なるはおのつから終止といふ活用なるものを終止形
といふことなり

羅行四段活
かくる。
つくる。
くる。
まもる。
まもる。

佐行下二段活
かくれる。
つくれる。
くれる。
まもれる。
まもれる。

右上なるものをうつす紙をいう詞下なるを他に紙をものをいう詞なり

佐行四段活

羅行中二段活

あ。

さ。

ら。

右上なるものをうつす紙をいう詞下なるを他をものをいう詞なり

佐行四段活

羅行下二段活

あ。

か。

く。

つ。

ぬ。

右上なるものをうつす紙をいう詞下なるを他をものをいう詞なり

○和行より羅行をうつして自他のものをうつす例

和行下二段活

羅行四段活

ま。

右上なるものを他をものをいう詞下なるをうつす紙をものを

いてこそるり

○佐行と羅行なるべき佐行ようつたるもあれば羅行
ようつるもあれおのつる佐行と羅行とを見分
のるれる例

佐行四段活

かくも。
さくも。
のくも。
やくも。
ゐくも。

羅行四段活

かくる。
さくる。
のくる。
やくる。
ゐくる。

右上なるもあるを羅行下なるもおのつる佐行を
いてこそるり

佐行四段活

あくる。
くくる。
けくる。
さくる。
たくる。

羅行下二段活

あくる。
くくる。
けくる。
さくる。
たくる。

右上なるはあるを羅行下なるもおのつる佐行をい
こそるり

佐行下二段活

のせる。
ようせる。

右上なる所を他よりなることといふ詞下なる所をこつて佐行
といふことはなほ四段の事なれどもよくることあるべし
右のごとく活用の例は中二段の活用の毛行の第二は書きちひみ
いりゐ。また下二段の活用の毛行の第四の言えけせてれへめえれ
えよさとのそひて佐行ようつるから文字のそひて羅行ようつる
活用は事なし一段の活用も此例あるこゝに佐行羅行なる
ま下二段の活用よりきれる所を例を挙ぐこゝ上のごとく活用

羅行四段活

のる。
ようる。

合せてきいとなる。○所ハ中二段の活の第二は書下二段
の活は第四の言は書たるこゝ上のごとく活用なるなり
そひしるれまたるこゝ上のごとく活用なるなり
○中二段の活用は佐文字はそひて佐行ようつる例

加行
おくる。
あきさせる。

多行
くつる。
そちさる。

波行
ようる。
ようひさる。

麻行

あ　あ

也行

や　や

羅行

ら　ら

たゝとゝ　ゝ　ゝ　

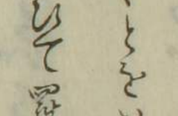
ならぶ
麻行
きもむ
和行
うゐ
右上なるをあと他をいと同下なるを他とさうさきをいつてこゝなり
○中二段の活用より羅文字をめそひて羅行よりうかる例
加行
おく
あきらく

多行
そぶ
波行
こぶ
麻行
うむ
也行
くゆ
羅行
おる

右上なるハうゑの細下なるハ他と志てうせら
ゑとおのてゐの細せゑとをゐの細ちり

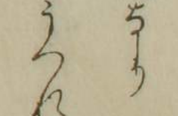
○下二段の活用と羅文字とを以て羅行ようゐ例

阿行

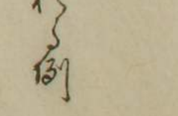


加行

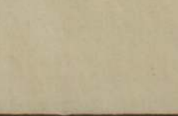
佐行



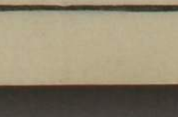
多行



奈行



波行



麻行

和行

右上なるうゑひを志てうせらの細下なるハ他と志てうせら

うしとおのつゝ紙せらるゝことをいふ詞なり

○又加行しも也行ようつゝて自他のうゝ幸たゝなまあけ
ゝる詞のうなり所なる例あるくおくられと来ることあるらん

加行四段活　　也行下二段活

き〻。　　きこゆる。

右上なる仕物と紙をゝとをいふ詞下なるもおのつゝ紙ゝと
いふこゝなり

○又同じ詞なるゝ清濁よりて自他のうゝれゝふたゝなる
あけゝる詞のゝてある例なゝ

加行下二段活　　同活

さゝぶる。　　さゝぶる。

右清濁をおのつゝ紙ゝをいふゝゝ濁音は物を紙を
ゝとつゝ紙なり

○又一段の活詞をいゝなきふ自他のうゝるゝ大ゝ
ゝ屋ゝなゝけさまゝなゝ次よあけゝることをゝて出ゝ

加行一段活　　佐行下二段活

こゆる。　　きこゆる。

右上なるゝゝゝゝ紙をゝとをいふ詞下なるゝ他ゝ紙をゝ
をいふゝ紙なり

奈行一段活　　佐行下二段活

[illegible]

右上なるをおのつから終るをいふ詞下なる八物を終さるをいふこと葉なり

奈行一段活　也行下二段活

[illegible]　[illegible]

右上なるを物と終さるをいふ詞下なるをおのつから終るをいふこと葉なり

波行一段活　佐行下二段活

[illegible]　[illegible]

右上なるものを他ゟ終さるをいふこと葉なり

麻行一段活　也行下二段活

[illegible]　[illegible]

右上なるを物と終さるをいふ詞下なる八おのつから終るをいふこと葉なり

也行一段活　佐行下二段活

[illegible]　[illegible]

右上なるものを他ゟ終さるをいふ詞下なる八他ゟ終さるをいふこと葉なり

和行一段活　羅行下二段活

みる

右上なるをうつうつ活をうつをいふ詞下なるおのつうつ活せらるをいふ詞なり

又万葉よりみをなし　うつうつかなし　なくうつかなし

を奈行一段の活詞の例のうつ第一のうつなるより佐行四段乃活詞ようつて自他のうつれうつるをおのつうつ活るをいふ詞なるをあをなをうつをいふ詞なるをとおなじ

又なびをのびるうつうつ第一のうつみの音より佐行ようつうつる

うつ又波行一段の活詞のひるの第一のうつみの音より佐行四段の活詞ようつて活ることなるとなくおなじうつる

奈行下二段の活詞のぬるの第一のうつなると佐行四段の活詞よりのうつなるもはしる活きうつる

見まもるあけるうつる行くの詞も於多れとうつれをいふ

出やう服をなるうつて活きうつる又活きうつるなるとおひ出るまうつる出ーなれて行るうつるあうつ見もなるて

らくてうつうつ

○又自他をうつ詞のうつて活きうつうつれと同じうつなる詞うれうつるあうつ次より出ーうつをうつてうつ

らく

よくる

見を加行四段の活詞と同中二段の活詞うつ

おびやかす

是も芸よ佐行四段の活用そかとゝのそゝゝゝゝのゝ

なり

ひつ。

是も多行四段の活用と同中二段の活用なり

さのふ。

まなふ。

こも波行四段の活用と同中二段の活用なり

さもらふ。

こハ波行四段の活用と同下二段の活用なり

たゝる。

ゝゝる。

是ハ羅行四段の活用と同下二段の活用なり

かゝる。

ふる。

ゝもる。

これゝも羅行四段の活用と同下二段の活用そて同となし

とかゝる ふる ゝもる と羅よ活しいふをいそゝくの活き

根ゝて後の世よそ考えていそゝかをいさこう となり

えゝる。

たゝる。

ゝゝる。

かゝる。

ふる。

ゝもる。

こそ苦ふ羅行下二段の活用てことはそそくるれそなり

くるる。

ふる。

それくるとそそふ佐行四段の活言葉てかとはふとなこ

そそくるなるあこなり

うるふ。

あるふ。

こそとそふ波行四段の活言葉てふとはなとそそ

ヲくるるのこなり

おそれゆる。

みそそる。

毛い苦ふ也行下二段の活用てことはそそくるれそなり

まるる。

こい苦ふ羅行四段の活用てそそくるたるあこなり

むそそる。

毛も苦ふ羅行下二段の活用てふとはそそくるれそなり

かるる。

こも加行四段の活用と波行四段の活用とるり

むる。

毛も加行四段の活用と波行四段の活用とるり

こる。

こを佐行四段の活用と也行下二段の活用とする

こハ佐行四段の活用と羅行四段の活用となる

こを佐行下二段の活用と波行下二段の活用とする

こを波行四段の活用と也行下二段の活用とする

八衢波行四段の活用の未然形と云ふ事なるべし

と云ふ説を引て用ゐると云ふ説を行と活とを用ゐる

説なるべしと云ふ事なるべしと云ふ事をあやまりなり

こを波行四段の活用と佐行四段の活用とする

こを波行下二段の活用と佐行四段の活用とする

こを波行四段の活用と羅行四段の活用とする

こハ波行中二段の活用と羅行四段の活用となる

くろむる　くろまだ
さくもる　さくさだ
なくもる　なくだ

ゐホを麻行下二段の活用と佐行四段の活用とする
こゆる　こやだ

こゑを他行中二段の活用と佐行四段の活用とする
くゆる　くやむ

こゆを他行中二段の活用と麻行四段の活用とする
あゆる　あやうる

こゑを他行下二段の活用と羅行四段の活用とする

このゝゝひも紐あゝゝ　なゝゝゝくてもゝゝ
もゝゝてゝゝゝゝゝ物のおのゝゝ紐ゝゝゝゝゝ

詞のさまなれと風の物はれまきるまゝ給いつゝ
くいつゝ見も侘のまゝ
をむ絲とゝつゝて他ゝ絡ゝる詞の言ゝ山ゝ
といさいつゝ不をむ絲といひ文れいれひもなとそのゝつゝ不
をひねりてたつけゝるなりこれゝとも兼ゝ又のまゝる
とゝ詞とゝれゝと同ゝ他ゝ絡するゝ詞なゝ
又ゝなゝのあくゝおのつゝゝ絡ゝを以ゝこゝゝあくゝゝを物を
絡ゝゝるゝゝとゝゝなゝゝを夜の事をゝつゝゝあくゝゝるゝゝいゝ
おのつゝゝ絡ゝゝゝゝあゝゝゝゝゝゝ絡ゝゝゝゝゝ詞ゝゝ
さてあまれゝをあくゝゝゝゝゝゝ

おひそさゝもりをゝあるを伯母のうゝをあひ出て尾羽の
方ハおひいつるゝをゝもうゝいるゝゝひ抜いゝおかし
又身をうき草れをゝゝえて うゝ事あれやねをたゝえてゝあな
とあるまゝてたゝえてハ物のおのつゝ絵をいゝ羽なるふゝ
いひてを自他なゝひゝれゝ思らゝいるゝ又をしゝあてはるの
ゆゝとゝもゝめをふゝあるもゝゝゝてゝあゝきをゝゝてゝい
ゝ又爰ゝもゝせゝさあさゝゝゝとゝゝもさゝゝさゝゝゝ
ゝゝへゝきをゝゝいゝゝ又源氏よおのゝゝをゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝきをゝゝて見ゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
又ゆゝゝゝゝ物のおのつゝゝ絵をゝゝ羽をゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝ羽なゝを 昔ひめゝゝ絵 ゝゝひをゝゝ絵なゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝ絵ゝゝ
又古今集よ 世尊ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちき名をとゝちなとあゝちきてゝゝつを物のおのつゝちきゝを
つゝ同なつゝを物と物をきゝとつゝ同なれゝとゝよをといひてを
物を物をきゝるゝてなゝてとゝいゝきをたちとゝつゝこれもゝう
あゝ事なゝくゝあゝ甲又弟者集をゝてゝゝて歌名をゝゝゝゝ
ふつゝき先よまゝをせてをゝしゝとあゝ色もゝてめとゝつゝきを
たゝめとゝくゝどゝをものゝをなゝりてれゝさゝゝて物ゝゆゝな
ゝとよふあけゝゝ古今集の名をゝやゝちなむをかゝを改ゝゝ板
本ゝ名をゝやゝゝてなむゝあゝを中ゝゝちゝゝらなゝゝ又後撰
集ゝゝをゝて花のゝゝかゝゝゝゝゝゝあゝなゝ名をゝや
ゝなむと文字ゝてゝゝれゝてなゝちゝたゝてゝゝれゝさゝを八代集抄

よたちなむとゝけゝゝゝさゝゝ一本ゝゝゝゝゝ又伊勢集ゝ人ゝ
ゝゝゝ尾ゝゝ神ゝゝゝゝゝゝ

又今は人の家小嵐風なとふ　ふきなびく　ふきちる　吹られて
なとあるを自他混雜してとくはけしきを由をふくを嵐風
春のちるをいとてうつる花をちりなびくちるられてな
とは春雨雪をなとれおのつうつる花をつとなしてちるこれ
たるひなかあるくし
又霧なとふ　おきそふ　おきそふなるあるをそふ霧のおのつ
うつるをふなるをつるを霧をそつるを物を花をるさうちう
たるくし霧おきそふる秋のうつせ　霧おきそふてあきそふし
ゆくなるあ八秋の初風が霧をおきそふしゆく秋うつゆをおき
そふるなるかくつをを風秋なるの花をそふ海よりひなせる

なうにれをおのつうう花をるよ八のとうひ物を花をそうかこ八を
とふちあ又風花なふ八ふ　咲る　咲ふてな
少あるも風をなるのおのつうう花をふうう咲ふうう咲ふうをい
ひ吹ふて咲ふてなとあるを風ふの花ちせるさるふひなし
うるなるう
見られるひも花あるくしなるるふて初きなるまを今集
よめきみる人るあるるるもるもるもちるるてのせ
るるるふ後花を集ふおきあるうるるなるもる萩の葉ふ霧
ふきみるる秋の花をせなるあるみるるをみるるるを
あるをるるるるるなるるるるるふ又めきふきふ風人なるれちる

みづからをおのづから結ぶことなして自他混雑してかたちをなる

なりてこゝにはじめてこゝに曙きみづからとりみづからとして四辰のこゝらきこゝ

に集ふてみづからとりみづからとしたもちろん野ひまうつくしこゝに